黒澤幸子さんを偲ぶ（福田泰二）

Yasuji FUKUDA: Remembrance of Dr. Sachiko Kurosawa

177-0041 東京都練馬区石神井町 8-32-22
8-32-22, Shakujii-machi, Nerima-ku, Tokyo, 177-0041 JAPAN

黒澤さんがお亡くなりになった（なっていた）ことを金井さんから知らせていただき，大橋さんからは追悼文を書くので写真がほしいという要望を聞いたが，それから何日か経ってお二人から，何人かで追悼記を書く中に私も参加するようにと勧めていただいた．彼女の学問的な業績などキチンとしたことは他のかたが書かれるに違いないので，別の面を書いてみる．

半世紀あまり前に私が本郷の植物教室に進学したとき，黒澤さんはすでに何年かそこに勤務しておられた．東武東上線の沿線にお住まいだったので，西武池袋線を使って通学する私はときどき地下鉄丸の内線で乗り合わせることになった．彼女の乗車位置はいつも決まってドアのすぐ脇のやっと一人だけいつも立てる所だった．そこで壁を向き，降車駅まで乗客の誰とも顔を合わせないのがお好きらしかった．私は彼女の存在に気づいても本郷三丁目で降りるまでは声をかけるチャンスがなかった．

このことに象徴されるように，人の前に出ることはお好きでなかったし，写真を撮られることも避けていらっしゃったように思う．ヒマラヤ遠征隊の集合写真などの場合には止むを得ず（?）カメラを直視しておられるが，スナップ撮影をしようとすると逃げ隠れされて，被写体になっていただくのは困難だった．その中で，美貌をよく伝えていると思うものを大橋さんに送っておいた．

昔々東大・理・植にいた人がだんだん減っていくのは仕方がないかも知れないが，黒澤さんのご逝去はやはり淋しい．

（元東京大学理学部植物学教室・助手）

黒澤幸子さんの思い出（大場秀章）

Hideaki OHBA: A Memory of Dr. Sachiko Kurosawa

東京大学総合研究博物館
University Museum, University of Tokyo, 7-3-1, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0033 JAPAN

黒澤幸子さんは東京大学理学部植物学教室の原寛教授の指導のもとで，世界で初めて現地で採集した材料にもとづいてヒマラヤ植物の染色体を研究した先人である．1966 年に発表された Cytological studies on some eastern Himalayan plants and their related species は記念碑的な論文である．

黒澤さんが研究を進めていた頃は，まだ染色体の観察に必要な根端などの部分を現地で固定して持ち帰ることはできなかった．そのため，ヒマラヤで集めた多量の生きた植物や種子が，東京大学の植物学教室の圃場や温室などに鉢植えされており，夏には暑さを避けて冷涼な軽井沢などに運ぶことも多かった．

私が黒澤さんに初めてお目にかかったのは，論文の指導を受けるためにお訪ねした原寛教授室でだった．1969 年だった．部屋の壁側に向いて熱心に顕微鏡をみていた光景が思い浮かぶ．その時，原先生は日本産ベンケイソウ科植物の染色体を観察して，異数性と倍数性を明らかにし，形態との



黒澤さんと松谷暁子さん．東京から下田に向かう車中にて．1989 年 6 月．
Sachiko Kurosawa(left) with Akiko Matsutani(right), June 1989.

関連を調べる研究を推奨してくださった．観察に必要な技術は黒澤さんから学ぶことになった．プレパラートの封入にはマニキュアが役立つことや，化粧品の空き瓶が試薬瓶に使えることなどを教えていただいたものである．

1983 年からは，新たに高山帯を中心にヒマラヤ植物の研究を始めることにしたが，集団レベルでの細胞遺伝学的研究を重要な課題のひとつとした．私はこの研究について黒澤さんに説明したが，彼女は自らが進めてきたやり方では集団レベルの解析は無理なことを力説されたのだった．このことを受け，固定した材料を持ち帰り観察する方法を若林三千男さんが考案して集団レベルで染色体数の算定が可能になったのだった．

1976 年 3 月に本郷の理学部植物学教室から大橋広好先生が附属植物園に移ることになり，その前年から本郷の植物学教室内の分類学研究室は附属植物園に移動するための準備を始めていた．標本以外の様々なコレクションや未整理のまま放置された雑多な物品などの整理や移動，始末を行った．黒澤さんは教室の圃場で栽培していたヒマラヤ植物などの生品の整理に忙殺されることになった．すべてを機械的に附属植物園に移すのではなく，植物に合わせ，軽井沢や日光などに移動したのだ．これは車を運転しない黒澤さんにとっては難題だった．何度も電車で往復し，これを終えたのである．

附属植物園で私は 1978 年から 2 年間黒澤さんと同じ部屋で暮らすことになった．本郷の教室とは異なる環境に彼女は悩むことも多かったのだろう．その頃の彼女の憂鬱な顔が思い浮かぶ．やがて黒澤さんは教室に戻り，その後田沢仁教授の研究室で勤務することになり，再び本郷に移った．長年，彼女の研究を指導されてきた原先生は，教室の隣りといってもよい総合研究資料館（現，総合研究博物館）で研究を続けておられた．この頃，黒澤さんは原　寛先生を訪ねることも多かったと聞く．

1981 年に私自身，同資料館に勤務することになった．田沢研究室での勤務を経て，1988 年に黒澤さんは退職された．退職後も染色体の研究を進めるために，附属植物園に研究の場を与えられた．当時の資料館には彼女の研究に役立つ高レベルの顕微鏡がなかったのだ．

植物園に籍をもつ黒澤さんだったが，たまには資料館にも来られ，お茶の時間には教室の古い先生方にまつわるお話や黒澤さん自身の思い出を聞くことできた．

実現しなかったが，一度だけ黒澤さんと一緒の研究を企てたことがあった．これはアブラナ科のオオタネツケバナと近縁種の細胞分類学的研究だった．発覚した彼女の体調不良が研究を中断させ

たのだ．だんだんと黒澤さんの足は本郷から遠退いていった．私がお目にかかった最後は，リハビリのために通っていたプールからの帰りだった．2005 年のことだったように思う．

大先輩・黒澤幸子さんのこと（中馬千鶴）

Chidzu CHUMA: Cherishing the Memory of My Big Senior Sachiko Kurosawa

516-0035 三重県伊勢市勢田町 295-25
295-25, Seta-machi, Ise, 516-0035 JAPAN

私は東邦大学理学部 2 年次から，薬学部生薬学教室の久内清孝教授や幾瀬マサ助教授に許可を得て，教室の雑用をお手伝いすることになりました．夕方の 5 時になると，お決まりのティータイムでした．そこでは，当教室先生をはじめ，その日の来訪者などが一堂になり，にぎやかに色々なことが話題になりました．特に，久内先生が東京大学の原寛教授のもとを訪れた週末の翌週は，「原君がね・・・，クロちゃんがね・・・」と話は尽きませんでした．

クロちゃんとは，帝国女子理学専門学校卒業（東邦大学理学部の前身）の黒澤幸子さんのことでした．あるとき，朝日新聞一面に彼女の顔写真が出ました．東京大学植物学教室から，日本で初めて第二次ヒマラヤ地方植物調査隊に女性が加わるというのでたいへんなニュースになったのです．その時から，ぜひ一度黒澤さんにお会いしたいという思いは募り，機会があれば東京大学へご一緒させてほしいと幾瀬先生に頼み込みました．ある時，教授室に呼ばれ，幾瀬先生から東大の原先生・黒澤さんのもとへ植物を届けたいので植木鉢を持って行くようにと言われました．いよいよお二人にお会いできるのだと思うと，わくわくして胸が高鳴り夜も眠れないくらい興奮しました．ついにその日が到来し，ヒメザゼンソウの鉢を持ち，幾瀬先生の後について赤門をくぐり，植物学教室に入りました．幾瀬先生から原先生と黒澤さんに紹介して頂いた後，原先生は黒澤さんについて「黒いからクロちゃんと呼ばれてるんだよ」と，ちょっと笑いながらおっしゃいました．黒澤さんは肩まで垂らした，茶色がかった髪と白くない肌，鼻は高く，ガッチリした体格で，インド人と紹介されても違和感のない風貌でした．彼女は一言も喋らず，下を向いて仕事をされていました．

東邦大学を卒業後，東大植物学教室の研究生にしていただき原先生・黒澤さんとの毎日が始まりました．お二人について幾瀬先生から細々と注意を受けていましたが，心配は無用でした．黒澤さんからは，「私に敬語は使わないで！」というのが第一声でした．帰宅するときは翌日用に，やかんに一杯の水を汲み置きしておくことを教わりました．

その後，第三次ヒマラヤ調査隊がスタートし，生植物が現地から届くようになるとそれを持って 2 人で中軽井沢にある佐藤邦雄さん宅の庭に移植しました．彼女は，木の下へ植える植物への日光や雨のかかり具合いを見極め，植木鉢にいれたヒマラヤ植物にラベルを付けて，鉢を地面に埋めていくのでした．私はひたすら植木鉢の穴を大きな軽石で塞ぎ，さらに軽石で出来た土を詰めて，手渡した．根は空気を好み，乾燥しない程度に通気性を良くするのが第一と教えて下さった．当地は，浅間山の噴火で出来た軽石の土で出来ているのでどこを掘っても軽石の小玉は手に入った．ついに佐藤さん宅の庭はヒマラヤ植物で埋まりました．

夏休みになると，原先生の別荘に泊まりました．食事は黒澤さんと私が作りました．そこで大変なことが起こりました．料理はなにであったか忘れましたが，野菜の切り方でくい違いが生じ，二人とも大声で泣き出したのでした．原先生は非常に困られ，口をへの字に噤み，じっとされていました．それ以来，ぐっと彼女との距離が縮まり，自然体でお付き合いしていただけるようになりました．黒澤さんは買い物が苦手だということがわかりました．店の前まで来るとあれは良いけど，こちらは格好が良くないなどとおっしゃるのを聞い